

# 幾何入門 第11回



情報科学科 金子 晃

А л е к с е й К А Н Е Н К О

kanenko@is.ocha.ac.jp

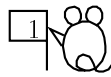
この講義のホームページ:

<http://www.atom.is.ocha.ac.jp/~kanenko/KOUGI/Geo/geo.html>

この講義のホームディレクトリ:

[edusv.edu.is.ocha.ac.jp/~kanenko/Geo](http://edusv.edu.is.ocha.ac.jp/~kanenko/Geo)

## 第6章 Riemann 幾何学

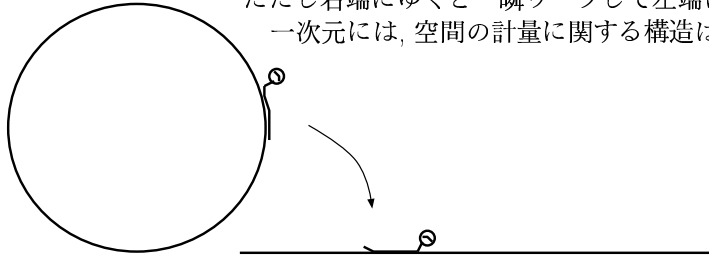


3次元空間内の曲面や曲線の曲がり方の考察は、普通は  
今まで述べて来たような、曲面を外から見たときの曲がり具合のこと

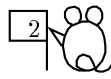
しかし、曲面の上で生活している生物にとっては、自分の空間の曲がり具合は  
これとは別の感じ方になる。

例： 一次元の国では、  
円周  $S = \{x^2 + y^2 = 1\}$  は外から (i.e. 平面曲線として) 見ると曲率を有する。  
しかし、円周の上に閉じ込められて外の世界が見えない生物にとっては、  
自分の世界は少しも曲がっていない。

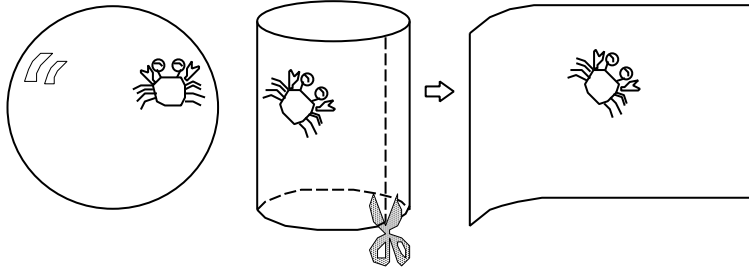
線分  $[0, 2\pi]$  の両端点を同一視したものと全く同じ。  
ただし右端にゆくと一瞬ワープして左端に居る。  
一次元には、空間の計量に関する構造は何もない。

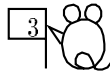


例：3次元の中の曲面の場合、



球面上に生活する生物は、  
たとえその外の3次元の世界から自分達の国を眺める機会が無くても、  
自分達の世界が曲がっていることが感じられる。  
例えば、3角形の内角の和を計算すると $\pi$ より大きくなることが観察できる。  
これに対し、円柱の表面は3次元から見ると曲がっているが、その上の生物は  
平らな面の上で暮らしていると思うだろう。





3次元空間内の曲面については、  
第一基本形式よりも第二基本形式の方が  
曲面の曲がり具合を良く表しているように見えたが、  
曲面に固有な曲がり方を表すのは、むしろ第一基本形式、すなわち弧長の方である。

一般に、 $n$ 次元の  $C^\infty$  級多様体  $M$  があるとき、  
その上の正値対称2次微分形式

$$\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(x) dx^i dx^j \quad (g_{ij} = g_{ji})$$

を  $M$  上の **Riemann 計量** と呼ぶ。  
座標変換は2次共変対称テンソルとして扱う。

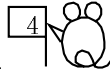
これは  $M$  上に距離を定める：

線素：  $(ds)^2 = \sum_{i,j=1}^n g_{ij}(x) dx^i dx^j$ ，  
曲線弧  $x = \varphi(t)$ ， $0 \leq t \leq T$  の長さ (道のり) は

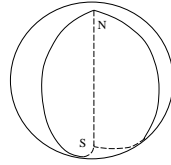
$$L = \int_0^T \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt}} dt$$

それでは、 $M$  上の二点  $P, Q$  の距離を、測る経路を指定せずに定められるか？

# 測地線



$M$  上の二点  $P, Q$  を決めるとき、これらをつなぐ  $M$  上の最短曲線弧のことをこれらの点を通る**測地線 (geodesic)** と呼ぶ。  
測地線に沿って測った長さが二点  $P, Q$  の**距離**である。



ある曲線が測地線かどうかは局所的に定まる。  
(逆に測地線は最長弧になることも有る.)  
測地線の例は球面上の大円弧 (geodesic の語源!)  
二点  $P, Q$  が十分に近ければ、最短経路は短い方の大円弧に決まる。  
北極と南極の場合は無数に有る  $\implies$  大域理論は難しい。

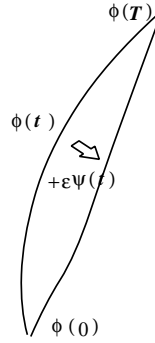
そこで、まず局所理論をやる。  
以下、曲線弧の両端点  $P, Q$  は同一座標近傍内にあるとする。

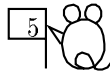
二点  $P, Q$  を時刻  $t = 0, t = T$  で通過するすべての径路の中で、長さが最短のものを  $x = \varphi(t)$  とする。

このとき、 $\psi(0) = \psi(T) = 0$  なる任意の函数ベクトル  $\psi(t)$  と任意の  $\varepsilon$  に対し、

$$\begin{aligned} \varphi(t) & \quad (0 \leq t \leq T) \text{ に沿う長さ} \\ & \leq \varphi(t) + \varepsilon\psi(t) \quad (0 \leq t \leq T) \text{ に沿う長さ} \end{aligned}$$

i.e.





$$\begin{aligned}
& \int_0^T \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt}} dt \\
& \leq \int_0^T \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t) + \varepsilon\psi(t)) \frac{d(\varphi^i(t) + \varepsilon\psi^i(t))}{dt} \frac{d(\varphi^j(t) + \varepsilon\psi^j(t))}{dt}} dt \\
& = \int_0^T \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij} \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt} + \varepsilon \left( \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} \psi^k + \sum_{i,j=1}^n g_{ij} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\psi^j}{dt} + \sum_{i,j=1}^n g_{ij} \frac{d\varphi^j}{dt} \frac{d\psi^i}{dt} \right) + o(\varepsilon)} dt \\
& = \int_0^T \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt}} dt \\
& \quad + \varepsilon \int_0^T \frac{\sum_{i,j=1}^n \sum_{k=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} \psi^k + \sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\psi^j}{dt} + \sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^j}{dt} \frac{d\psi^i}{dt}}{2 \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt}}} dt
\end{aligned}$$

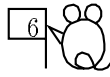
+ o(ε)

ここで対称性  $g_{ij} = g_{ji}$  を用いて分子の最後の二つの項をまとめると

$$\begin{aligned}
& = \int_0^T \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt}} dt \\
& \quad + \varepsilon \int_0^T \frac{\sum_{i,j=1}^n \sum_{k=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt} \psi^k(t) + 2 \sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\psi^j(t)}{dt}}{2 \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt}}} dt
\end{aligned}$$

+ o(ε)

任意符号を持つ微小な  $\varepsilon$  に対しこの不等式が常に成り立つためには、 $\varepsilon$  の一次項の係数 (変分) が消えなければならない:



$\Delta := \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt}}$  と置けば

$$\int_0^T \left( \frac{1}{2\Delta} \sum_{i,j=1}^n \sum_{k=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} \psi^k + \frac{1}{\Delta} \sum_{i,j=1}^n g_{ij} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\psi^j}{dt} \right) dt = 0$$

これが任意の  $\psi(t)$  について成立より  $\varphi(t)$  が満たす条件を求める.

括弧内の第2項において動く添え字  $j$  を  $k$  に書き換え,

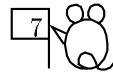
更に  $\psi(t)$  についての微分を部分積分で移す ( $\psi(0) = \psi(T) = 0$  に注意):

$$\begin{aligned} & \int_0^T \left\{ \frac{1}{2\Delta} \sum_{i,j=1}^n \sum_{k=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} \psi^k - \sum_{i,k=1}^n \frac{d}{dt} \left( \frac{1}{\Delta} g_{ik} \frac{d\varphi^i}{dt} \right) \psi^k \right\} dt \\ &= \sum_{k=1}^n \int_0^T \left\{ \frac{1}{2\Delta} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} - \sum_i \frac{d}{dt} \left( \frac{1}{\Delta} g_{ik} \frac{d\varphi^i}{dt} \right) \right\} \psi^k dt \\ &= 0 \end{aligned}$$

$\psi^k(t)$  は  $\psi^k(0) = \psi^k(T) = 0$  を満たす以外は任意の函数だから,

変分法の基本原理により, 被積分函数のそれに掛かっている部分  $\{ \} = 0$ .

Q 変分法の基本原理：連続関数  $f(t)$  が  $\psi(0) = \psi(T) = 0$  なる  
任意の  $C^\infty$  級関数  $\psi(t)$  に対して

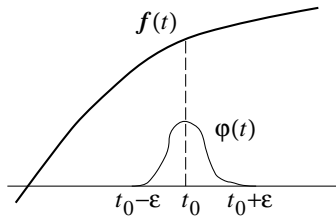


$$\int_0^T f(t)\psi(t)dt = 0$$

を満たすなら,  $f(t) \equiv 0$ .

∴ 例えば  $f(t_0) > 0$  とすると,  $t_0 - \varepsilon \leq t \leq t_0 + \varepsilon$  で  $f(t) > 0$ .

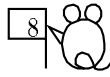
そこで,  $\psi(t) \geq 0$  を  $\psi(t_0) > 0$  かつこの区間の外では 0 となるように選べば,  
上の積分値  $> 0$  となり, 仮定に反する.





∴

$$\frac{1}{2\Delta} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} - \sum_{i=1}^n \frac{d}{dt} \left( \frac{1}{\Delta} g_{ik} \frac{d\varphi^i}{dt} \right) = 0, \quad k = 1, 2, \dots, n$$



これは変分法の一般論で **Euler-Lagrange の微分方程式** と呼ばれるもの  
 このまま計算を続けるのはものすごく大変なので、普通は次のように工夫する：  
 我々が求めているのは曲線の跡であって、パラメータ表示までは決まらない。

(パラメータを取り替えても曲線の弧長は変わらないから！)

そこで、パラメータは弧長パラメータの定数倍と仮定してしまう。

(弧長パラメータ自身にしてしまうと、パラメータの両端点  $0$  と  $T$  を固定して比較できなくなるので、弧長に比例すると仮定するのである。)

すると、各曲線上で、曲線に応じて定まる定数  $C$  が有って、

$$ds = \Delta dt = C dt \quad \text{i.e.} \quad \Delta = C \quad (\text{曲線に沿って定数})$$

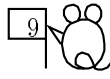
よって上の式で  $\Delta$  は  $\frac{d}{dt}$  をすり抜けて外に出るので、

$$\frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} - \sum_{i=1}^n \frac{d}{dt} \left( g_{ik} \frac{d\varphi^i}{dt} \right) = 0$$

従って

$$\sum_{i=1}^n g_{ik} \frac{d^2\varphi^i}{dt^2} = \frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} - \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ik}}{\partial x^j} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt}, \quad k = 1, 2, \dots, n$$

$$\begin{aligned} \sum_{i=1}^n g_{ik} \frac{d^2 \varphi^i}{dt^2} &= \frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} - \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ik}}{\partial x^j} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} \\ &= \frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} - \frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ik}}{\partial x^j} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} - \frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{jk}}{\partial x^i} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} \\ &= -\frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \left( \frac{\partial g_{ik}}{\partial x^j} + \frac{\partial g_{jk}}{\partial x^i} - \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \right) \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt}, \quad k = 1, \dots, n \end{aligned}$$



ここで、行列  $(g_{ij})$  の逆行列を  $(g^{ij})$  と置き、左から掛ける、すなわち、  
上の式の両辺に  $g^{kl}$  を掛けて  $k = 1, \dots, n$  について加えれば、

$$\frac{d^2 \varphi^l}{dt^2} = -\frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \sum_{k=1}^n g^{kl} \left( \frac{\partial g_{ik}}{\partial x^j} + \frac{\partial g_{jk}}{\partial x^i} - \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \right) \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt}, \quad l = 1, \dots, n$$

Riemann 幾何学では、

$$\Gamma_{k,ij} := \frac{1}{2} \left( \frac{\partial g_{ik}}{\partial x^j} + \frac{\partial g_{jk}}{\partial x^i} - \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \right), \quad \Gamma_{ij}^l := \sum_{k=1}^n g^{kl} \Gamma_{k,ij}$$

と置き、Christoffel の 3 添字記号と呼ぶ (テンソルではない)。

対称性：

$$\Gamma_{k,ij} = \Gamma_{k,ji}, \quad \Gamma_{ij}^k = \Gamma_{ji}^k$$

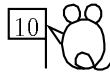
この記号を使うと、測地線の方程式は (最終的に  $l$  を  $k$  と書き直して)

$$\frac{d^2 \varphi^k}{dt^2} + \sum_{i,j=1}^n \Gamma_{ij}^k \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} = 0, \quad k = 1, \dots, n$$

という連立常微分方程式になる。

$\Gamma_{ij}^k$  にも  $x = \varphi(t)$  が代入されるので、これは

猛烈に複雑な非線型連立方程式であり、めったに解けない！



Q 測地線の常微分方程式は、 $\varphi(0)$  と  $\varphi'(0)$  を初期値として

与えれば、解が少なくとも局所的には一意に定まる。

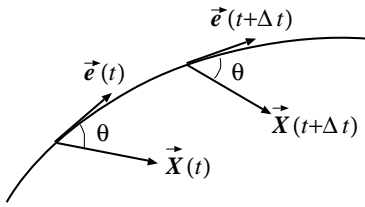
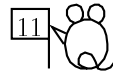
我々はこの方程式を、パラメータ  $t$  が弧長に比例すると仮定して導いたが、この方程式の勝手な解はその条件を満たしているであろうか？

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} \Delta^2 &= \frac{d}{dt} \sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \dot{\varphi}^i(t) \dot{\varphi}^j(t) \\ &= \sum_{i,j,k=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x^k} \dot{\varphi}^i(t) \dot{\varphi}^j(t) \dot{\varphi}^k(t) + \sum_{i,j=1}^n g_{ij} \ddot{\varphi}^i(t) \dot{\varphi}^j(t) + \sum_{i,j=1}^n g_{ij} \dot{\varphi}^i(t) \ddot{\varphi}^j(t) \\ &= \sum_{i,j,k=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x^k} \dot{\varphi}^i(t) \dot{\varphi}^j(t) \dot{\varphi}^k(t) \\ &\quad - \sum_{i,j=1}^n g_{ij} \sum_{k,l=1}^n \Gamma_{kl}^i \dot{\varphi}^k(t) \dot{\varphi}^l(t) \dot{\varphi}^j(t) - \sum_{i,j=1}^n g_{ij} \sum_{k,l=1}^n \Gamma_{kl}^j \dot{\varphi}^k(t) \dot{\varphi}^l(t) \dot{\varphi}^i(t) \\ &= \sum_{i,j,k=1}^n \left( \frac{\partial g_{ij}}{\partial x^k} - \sum_{l=1}^n g_{lj} \Gamma_{ki}^l - \sum_{l=1}^n g_{il} \Gamma_{kj}^l \right) \dot{\varphi}^i(t) \dot{\varphi}^j(t) \dot{\varphi}^k(t) \end{aligned}$$

ここで ( ) 内は

$$\begin{aligned} &\frac{\partial g_{ij}}{\partial x^k} - \Gamma_{j,ki} - \Gamma_{i,kj} \\ &= \frac{\partial g_{ij}}{\partial x^k} - \frac{1}{2} \left( \frac{\partial g_{kj}}{\partial x^i} + \frac{\partial g_{ij}}{\partial x^k} - \frac{\partial g_{ki}}{\partial x^j} \right) - \frac{1}{2} \left( \frac{\partial g_{ki}}{\partial x^j} + \frac{\partial g_{ji}}{\partial x^k} - \frac{\partial g_{kj}}{\partial x^i} \right) = 0 \end{aligned}$$

# Levi-Civita 接続



Tullio Levi-Civita  
(1873-1941)

測地線を手がかりに、空間のねじれ具合を読み取る。

測地線が直線だと思えば、測地線の接線はすべて互いに平行なはずである。

今、測地線  $\varphi(t)$  に沿うベクトルの平行移動作用素を  $\tau(t)$  と書くと、

ベクトル場  $X = \sum_{i=1}^n \xi^i \frac{\partial}{\partial x^i}$  の測地線に沿う変化率は、 $Y = \varphi'(0)$  として

$$\nabla_Y X := \lim_{t \rightarrow 0} \frac{\tau(t)^{-1} X(\varphi(t)) - X(\varphi(0))}{t}$$

$$= \sum_{i=1}^n \frac{d\xi^i(\varphi(t))}{dt} \frac{\partial}{\partial x^i} + \sum_{i=1}^n \xi^i \lim_{t \rightarrow 0} \frac{\tau(t)^{-1} \frac{\partial}{\partial x^i} - \frac{\partial}{\partial x^i}}{t}$$

最後の極限は、 $X$  の変化ではなく、空間のねじれに起因する。今、これを

$$\lim_{t \rightarrow 0} \frac{\tau(t)^{-1} \frac{\partial}{\partial x^i} - \frac{\partial}{\partial x^i}}{t} = \sum_{k=1}^n A_i^k \frac{\partial}{\partial x^k} \text{ と置き、未定係数法で } A_i^k \text{ を決定する。}$$

仮定により、 $X = \varphi'(t) = \sum_{i=1}^n \dot{\varphi}^i(t) \frac{\partial}{\partial x^i}$  が測地線の接線ベクトルのときは

$$\begin{aligned} \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \frac{\tau(t)^{-1} X(\varphi(t)) - X(\varphi(0))}{\Delta t} &= \sum_{i=1}^n \frac{d\dot{\varphi}^i(t)}{dt} \frac{\partial}{\partial x^i} + \sum_{i,k=1}^n \dot{\varphi}^i A_i^k \frac{\partial}{\partial x^k} \\ &= \sum_{k=1}^n \ddot{\varphi}^k(t) \frac{\partial}{\partial x^k} + \sum_{i,k=1}^n \dot{\varphi}^i A_i^k \frac{\partial}{\partial x^k} = 0 \end{aligned}$$

$$\bullet \ddot{\varphi}^k(t) + \sum_{i=1}^n \dot{\varphi}^i A_i^k = 0, \quad k = 1, \dots, n$$

これを測地線の方程式と比較して

$$\bullet \sum_{i,j=1}^n \Gamma_{ij}^k \dot{\varphi}^i \dot{\varphi}^j = \sum_{i=1}^n \dot{\varphi}^i A_i^k, \quad k = 1, 2, \dots, n$$

これが、任意の測地線  $\varphi(t)$  について成り立つような  $A_i^k$  は無数に有るが、 $A_i^k$  の  $\dot{\varphi}$  に関する一次部分もまた上を満たすので、

最初から  $A_i^k = \sum_{j=1}^n a_{ij}^k \dot{\varphi}^j$  と仮定するのが自然。

ここで  $a_{ij}^k$  を、 $i, j$  について対称と仮定すると、 $a_{ij}^k = \Gamma_{ij}^k$  に確定する。

従って、

$$\begin{aligned} \nabla_Y X &= \sum_{k=1}^n \frac{d\xi^k(\varphi(t))}{dt} \frac{\partial}{\partial x^k} + \sum_{i,j,k=1}^n \xi^i \Gamma_{ij}^k \dot{\varphi}^j(0) \frac{\partial}{\partial x^k} \\ &= \sum_{j,k=1}^n \frac{\partial \xi^k}{\partial x^j} \dot{\varphi}^j(0) \frac{\partial}{\partial x^k} + \sum_{i,j,k=1}^n \Gamma_{ij}^k \xi^i \dot{\varphi}^j(0) \frac{\partial}{\partial x^k} \end{aligned}$$

$Y = \dot{\varphi}(0)$  は任意のベクトル場  $\sum_{j=1}^n \eta^j \frac{\partial}{\partial x^j}$  としてよいから、

$$\nabla_Y X = \sum_{j,k=1}^n \frac{\partial \xi^k}{\partial x^j} \eta^j \frac{\partial}{\partial x^k} + \sum_{i,j,k=1}^n \Gamma_{ij}^k \xi^i \eta^j \frac{\partial}{\partial x^k}$$

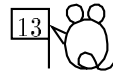
これをベクトル場  $X$  のベクトル場  $Y$  に沿う共変微分と呼ぶ。

特に、

$$\nabla_{\partial/\partial x^j} \frac{\partial}{\partial x^i} = \sum_{k=1}^n \Gamma_{ij}^k \frac{\partial}{\partial x^k}$$

これが Christoffel 記号の意味である。

# Riemann 多様体の曲率



Riemann 計量  $\sum_{i,j=1}^n g_{ij} dx^i dx^j$  が与えられた多様体を

Riemann 多様体と呼ぶ.

Riemann 計量が対角型  $(dx^1)^2 + \dots + (dx^n)^2$  でない

$\iff$  空間がゆがんでいる.

Riemann 計量から, 空間の曲がり具合を表すテンソルが誘導される:

$$R^l_{ijk} := \frac{\partial \Gamma^l_{ki}}{\partial x^j} - \frac{\partial \Gamma^l_{ji}}{\partial x^k} + \sum_{m=1}^n (\Gamma^l_{jm} \Gamma^m_{ki} - \Gamma^l_{km} \Gamma^m_{ji}) \quad (\text{曲率テンソル})$$

$$R_{ij} = \sum_{k=1}^n R^k_{ikj} \quad (\text{Ricci 曲率})$$

$$R = \sum_{k=1}^n R_{kk} \quad (\text{スカラー曲率})$$

特に,  $M$  が  $\mathbf{R}^3$  内の曲面で,  $g$  が  $\mathbf{R}^3$  の Euclid 距離から

自然に誘導された計量の場合は,  $R = 2K$  となる.

このように座標成分で書くと, テンソルになることを調べるだけで大変!